福岡大学法科大学院
令和３年度Ａ日程小論文試験
出題趣旨・採点基準

【出題趣旨・採点基準】

設問１
　問題文を分析させて正確な読解力，分析力を問うとともに，文章表現の正確性や分かりやすさを問う趣旨で出題した。(15 点)

設問２
　問題文を分析させて正確な読解力，分析力、論理判断を問うとともに，文章表現の正確性、論理性や分かりやすさを問う趣旨で出題した。(15 点)
　エッセンシャル思考の説明につき５点、武器と考える理由につき５点、論理性と分かりやすさにつき５点を一応の目安とする。

設問３
　問題文を分析させて正確な読解力，分析力を問うとともに，文章表現の正確性や分かりやすさを問う趣旨で出題した。(15 点)

設問４
　問題文を、あえて批判的に分析させることにより、異なる立場に立つ者に関する理解力、柔軟な発想を問う趣旨である。正確な批判を行うための論理性や、立場の違いを表現するための文章表現の正確性も求められる。(15 点)
　批判の内容の着眼点や正当性につき８点、文章表現の論理性や正確性につき７点を一応の目安とする。

＜基本とする評価段階＞

基本とする評価段階		60 点満点	設問 1～4 (15 点)
S	(きわめて優れている)	55 点以上	14 点以上
A	(優れている)	50 点	12 点
B+	(平均的レベルをやや上回る)	40 点	10 点
B	**(平均的レベルである)**	**30 点**	**8 点**
B -	(平均的レベルをやや下回る)	25 点	6 点
C	(やや劣る)	15 点	4 点
D	(劣る)	5 点	2 点
F	(入学を認めることに問題がある)	0 点	0 点

（解答例と解説）

設問１

ジェフ氏は、働きすぎることは簡単であり、活動的で向上心あふれる人にとっては、自分を酷使することは苦痛ではなく、働きすぎないようにすることの方が難しいと考えている。本文では、ジェフ氏が８時間以上眠る理由について、直接的には述べていないが、十分な睡眠を確保することによって、自分を酷使せず、働きすぎないようにするために、８時間以上の睡眠をとることにしているものと思われる。

【解説】　この問題の難しさは、登場人物（ジェフ氏）の考えは明確には記述されていないことである。

筆者（マキューン氏）の考えが、さもジェフ氏の考えであるかのように書いてあるが、ジェフ氏自身の考え（ここで訪ねている理由）は、明確には記述されていないため、何らかの推論によるしかない。そのような部分を明確に書き分けているものは高く、マキューン氏の意見とジェフ氏の意見を混同しているものは、それなりに評価すること。

設問２

エッセンシャル思考とは、少ない時間とエネルギーで最大の成果を出すための考え方をする人をいい、計画的に十分な睡眠をとることで、仕事の質を最大限に高め、自分という資産をうまく守るので、ここぞというときに十分な力を発揮できると考えているから。

【解説】　文中には､エッセンシャル思考の定義と､エッセンシャル思考の人の考え方および行動に関する傾向が記述されている。正確な回答を行うためには､何が定義で､何が思考や行動に関する傾向なのかを正確に読み分ける必要がある。前半は､文中の定義を用いて説明できているか､後半は、思考や行動に関する記述を理由として言い換えることができるか､が評価のポイントになる。

設問３

マキューン氏が、８時間睡眠を推奨する医学的根拠として挙げた理由として、第一に、ハーバード・メディカルスクール教授のチャールズ・A・ツァイスラーが指摘した、睡眠不足は酒の飲みすぎに似ている、すなわち、1 日の徹夜や 1 週間の 4～5 時間睡眠によって血中アルコール濃度 0.1%分に相当する機能低下が起こること、第二に、ドイツのリューベック大学の研究が指摘した、十分な睡眠は脳の機能を高め、問題解決能力をアップさせるという結果が生じたことをあげている。

【解説】　文中に記載さている理由は、この２点である。根拠となる研究に関する記述は必要ではないが、上記の程度であれば問題はない。

あるいは、より具体的かつ明確な記述である、8 時間睡眠が必要な根拠として、ドイツのリューベック大学の研究で、数学の問題に関して、8 時間寝たグループの正答率は、眠れなかったグループの 2 倍だったことに絞って書いた回答も、正解とすべきである。

「私たちが眠っているあいだ、脳は膨大な情報の整理と再構築をおこなっている」ことや、「起きたときには神経の新たなつながりができて、より多様な解決策を見つけることが可能になる」ことも、根拠としてあげることが可能かもしれないが､「医学的根拠」としては弱く、マキューン氏の見解と考えるべきである。不正解ではないが､それなりの評価を行うべきである。

設問４

非エッセンシャル思考の人の立場に立った場合、睡眠を武器と考える人に対しては、計画的に十分な睡眠をとることで、必ずしも仕事の質が高まるとは限らない。仕事の質を高めるのは仕事に関する緊張感と集中力であって、必ずしも睡眠時間とイコールではないと考えられることが反論として挙げられる。また、マキューン氏に対しては、多忙な業界の優秀なリーダーたちが、8 時間睡眠をアピールするようになったのは、大成功した後のことであって、成功するまでの過程では睡眠時間を削って実力を養い伸ばしていたものと考えられること、事実、ジェフ・ペソス氏も体を壊すまで働いたことにより、一定の成功を収める実力を養ったと考えるべきであり、その間のハードワークが無ければ、今のような成功を収めるのは不可能であったものと思われるとの反論が可能である。

【解説】　成功者の発言や科学的な研究を根拠としてあげた文章は、説得力があり、一見真実を述べているかのようにも思われる。しかしながら、その文章を批判的に読んだ場合、論理に飛躍があったり、前提条件が異なっているため根拠としての信頼性に欠くことも少なくはない。

本文でも、そのような指摘が可能な記述は少なくない。反論点やその理由に関しては、例文の内容に限る必要はなく、それなりの正論で説得力のあるものであれば、高く評価すべきである。一方、難癖に近いような正当性を欠く批判や、論理性に欠け説得力のないものに関しては低く評価すべきである。